渡良瀬遊水地・ラムサール湿地へ
その背景三十年に

渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会
猿山弘子

三十年前の渡良瀬遊水地の写真を探した。とうとう昨年の台風十九号の水害で失ってしまったと諦めたとき、当時発行の小冊子表紙を思い出した。早速出版社にお願いし提供頂いた（随想舎）。ここから走り出した三十年の遊水地の姿を知っていただきたく、ペンを執る。

この一枚の写真は、初めて広大な遊水地を目前にした驚きの記憶を呼びおこす。遊水地の三分の一はすでに渡良瀬貯水池（谷中湖）完成間近であったが、残りはすべてヨシ原、彼方は地平線かと思われる見たこともない光景であった。

その二か月後シンポジウム「どうなる谷中村・・渡良瀬遊水地アクリメーション計画」（主催・渡良瀬川研究会）で、第三セクターによるヨシ原の遊水地の開発、ゴルフ場を中心とするレジャーランド建設の計画を知ることになる。

情報不足で遅れて知った事実はショックだった。遅ればせながら、それでもまず「詳しく計画と遊水池の実態を把握せねば」と、藤岡町の有志と「水土と緑を考える会」（会長・町田武士）を立ち上げた。一九八九年九月のことである。勉強会、観察会を意欲的に行い、そのたびに、豊かで貴重な自然に驚かされた。同時に開発への疑問は強くなり、翌一九九〇年、先のシンポで講師をされた「日本野鳥の会栃木県支部」支部長の高松健比古氏、「東京の水を考える会」の嶋津暉之氏等と連絡を取り「渡良瀬遊水地を守る利根川流域住民協議会」設立へとこぎ付けた。

一都六県の自然保護団体と個人が会員となった。発足当時、完成直後の谷中湖の水質は悪化し、死んだ魚が大量に護岸に打ち上げられ、トラックで回収されていた。その水を水道水源とする首都圏の水道水はかび臭く最悪の状況であった。そこへ「渡良瀬遊水地第二貯水池建設計画」（建設省）が浮上し、さらに埼玉県知事の「国際空港構想」が提案されたので、これ以上の開発は反対と意志は強かった。

まとめて、会の活動目標を五つとした。

① 渡良瀬遊水池のゴルフ場増設に反対する
② 第二調節池内の第二貯水池の造成に反対する
③ 渡良瀬遊水池をラムサール条約（水鳥と湿地保護の国際条約）登録指定地とすることを要望する
④ 渡良瀬遊水池の国際空港計画に反対する
⑤ 渡良瀬遊水地アクリメーションランド計画を凍結させる

どのように目標を達成するか。勉強会、シンポジウム、水質調査、生体調査、出版物の発行、国土交通省と交渉、自治体との話合いと、考えられるありとあらゆることを行った。

反対運動だけではない。国交省との水質・ヨシの共同調査、国交省の事業計画への対案として「渡良瀬遊水地エコミュージアム・プラン」を作成し、国交省に提案した。現在進めている「湿地再生基本計画」にこの提案は生かされて

いる。

会の取組の広がりには、多くの団体との協力体制があった。先に提案した「エコミュージアム・プラン」をどう実現するか、実践につなげるべく「わたらせ未来基金」（初代会長・飯島博氏）を立上げ（二〇〇一年）、「わたらせ未来プロジェクト」活動を積み重ね、若者を引き付けて二十年になる。

また、第二貯水池建設計画がストップしたものの、その後の湿地再生事業の進展・方向が見えない中、「渡良瀬遊水池をラムサール登録地にする会」（事務局長・浅野正富氏）を発足させた。これまでの関連団体をネット化し、ラムサール条約登録地への要望の署名活動を展開することからスタートした。地元からの一五〇〇〇名を超える署名は、周辺自治体、国交省、環境省を動かし、登録への道を開いていった。

活動の先達である「谷中村の遺跡を守る会」、「渡良瀬川研究会」、「田中正造大学」などから貴重な助言、協力を頂いたことは言うまでもない。

ある田中正造研究者が「渡良瀬の諸団体が仲の良いのは、正造さんがいるからですね」と言われた。大事にしたい。

二〇一二年七月三日、渡良瀬遊水地は世界が重要と認める「ラムサール条約湿地」に認証された。

これで目標に掲げた五つがすべて達成できたことになる。

登録認証式の翌朝、登録の背景に「渡良瀬遊水地の歴史を重視したこと、大規模な遊水地の湿地再生事業は世界でも初の試みであること」があったとお聞きした。感慨深い。

登録後七年経ち、湿地再生事業も試験掘削から本格掘削の段階に入るが、評価されることに加え課題も見えている。私たちも、湿地試験地の掘削直後から、「市民による生き物調査」（植物、昆虫、野鳥の分野）や、湿地保全活動を続けている。世界に開くラムサール湿地再生と共に歩みたい。調査や保護活動に高校生、大学生の参加もあり、次世代への引き継ぎを大いに期待する。

行政との協働も重ねられ、多くの市民が遊水地の素晴らしさを知る機会も増えている。

私たちがもう一歩踏み込むなら、やはり渡良瀬遊水地の歴史と自然をまるごと博物館「エコミュージアム」にすることだろう。

エコミュージアムの運営、遊水地の湿地管理は、市民と行政がセンターをつくり、共同で行う。市民参加型のミュージアムで、歴史や生物多様性の学習の場を備える。当然専従の学芸員・研究者を置けるようにしたい。

「渡良瀬遊水地エコミュージアム・プラン」の実現化を提案し続けて、次にバトンを繋ぎたい。